

旧交を温め、世代交代の進んだ交流会

公益財団法人宮城県結核予防会

健康相談所興生館 所長 鈴木 修治

第26回を迎えた本会議が9月5～10日の日程で中国の瀋陽市及び長春市の両市において開催されました。

瀋陽市での会議には瀋陽市内に留まらず各地から医療関係者が大勢参加されて開催されました。日本からは結核予防会本部の岡田国際部長、小林募金推進部長、奥村複十字病院呼吸器センター医長、羽入結核研究所事務部研究支援室員及び宮城県支部から私が参加し5名の参加となりました。会議に先立ち交流会議の開会式が行われ両国からそれぞれ挨拶が交わされました。会議では岡田部長がカンボジアにおける結核対策で日本の協力等により塗抹陽性結核をおよそ38%削減出来た成果を発表し、また奥村医長は耐性菌結核の治療について新たに開発されたデラマニド及びリネゾリドの効果について使用経験のデータを提示しながら解説されました。また小林部長は院内及び地域におけるDOTSの取り組みについて述べられ、院内及び地域両DOTS共に治療に関係する医療従事者の連携協力が必要で重要なことを説明されました。

発表が終了してから新しくなった瀋陽市胸科医院の結核病床を見学しました。病院全体で1200床のうち600床が結核病床となっており、結核の入院治療の需要がまだまだ多いとの印象を受けました。また劉院長はじめ病院の医師が若返ってきているように思いました。

瀋陽市では胸科医院において劉院長や姜書記と共にこの会議の創始者の一人で元瀋陽市防痲協会の曲先生にお会いすることが出来ました。曲先生は聞き取りと歩行に衰えが見られましたが話し方ははっきりとされており、まだまだお元気なご様子との印象を受けました。友好会議が開始されて間もない頃の写真を多数持参されて我々に示されながら説明をしていただきました。当時の先生方や多くの関係者の熱意に支えられて

これまで会議が継続されてきたことを改めて実感いたしました。瀋陽における2日間の日程を終えて瀋陽駅から高速鉄道で長春に向いました。

長春に着いた当日に宿泊先のホテルにおいて交流会議が開催され日本からは岡田部長、奥村医師、小林部長がそれぞれ瀋陽での発表と同内容の発表を行い、長春の結核病院からは結核性胸膜炎に関する発表がありました。

翌日は長春市の結核病院を見学しました。病院自体は2年前の訪問の時と大きな変化はなかったように思います。広大な病院の敷地内に農作物の栽培やら家畜の飼育やらが行われており療養施設としての面影が残っているように思いました。また張院長はじめ病院の医師が若返ったように思い、こちらの病院においても世代交代が進みつつあるように感じました。

また、張院長と共に漢方の製薬工場を訪れ、多様な原料から製品までの製造工程の一部を見学することができました。

長春市では瀋陽の曲先生と同様に創始期から参加されている楊先生にお会いすることができました。楊先生は長春市の防痲協会における仕事の第一線から退かれておりましたが、昼食時にお会いすることができました。以前と同様に明瞭闊達な話しぶりに変わりはなく、大変懐かしい思いがいたしました。

学術交流会議が26回を迎えて双方の交流者の世代交代が進んだように思いますが継続できることは素晴らしいことと考えています。これからも友好的な学術交流を発展させていけるようにと願うところです。

瀋陽から長春へ向かう列車の車窓からは延々と広がるとうもろこし畑が見え、日本の水田が広がる風景との違いに文化風土がそれぞれであることを感じました。



瀋陽市胸科医院 曲声華先生を囲んで



長春の地質宮博物館の前で楊家道先生と(筆者 左側)